

神仏と能

● 鎌田東二

— 神道と仏教から見た能の信仰世界（十二） —

弱者の痛み、声を聴く

ワザとしての申楽、疾病と『谷行』

～申楽と仏教（6）

本連載で、能が「魔縁を退け、福祐を招く」こと

を目的として持つ「天下の御祈祷」であることに繰り返し注意を喚起してきた。『風姿花伝』には、「外道ぐわいどうを和らげ、魔縁まごんを静む」「天下太平の御祈祷」とも、「天下安全てんかぜんぜんのため、且かつは諸人快樂しよにんげらく」ともあった。

今、日本国内のみならず、世界中で、新型コロナウイルスの感染拡大が続き、世界中が大混乱の危機的状况に陥っている。であるなら、今こそ「天下の

御祈祷・天下太平の御祈祷」として能が「天下」に奉納演能されねばならないのではないか。

一二二二年に著された鴨長明の『方丈記』には、養和の飢饉の際、仁和寺の隆暎りゅうぎょうという高僧が洛中に転がっていた四万二千三百人の死体の額に梵字を書いて供養したことがリアルに記されている。

乱世というのは、そのような数知れぬ死体が市中に可視化した時代である。そのような時代に「天下太平の御祈祷」として能は生まれてき、「花」や「幽玄」や「妙」といった美意識に彩られ意味づけられて次第に洗練の度合いを増し、「貴人」の観賞に供されるようになり、日本文化の精髓とまで称えられるようになった。そのような演劇的洗練と評価が生まれ

てくる根底に、「天下の御祈祷」としての呪術的・宗教的「願」があることを忘れてはならないのだ。演目の最初に奉じられる「翁」、また祝言曲としての「老松」や「高砂」「養老」などは、もちろんそのような呪術宗教的な「御祈祷」の核心である。

能はその根幹に弱者や敗者の痛みを抱え込んでいる。今風に言うならば、その痛みや悲嘆を可視化し、鎮静するためのスピリチュアルケアでありグリーンフケアであった。亡霊が抱え込んでいる霊的痛み（スピリチュアルペイン）を解きほぐし、その悲嘆（グリーフ）を和らげ、言霊の籠った謡の声音と優美なる舞によつて、その霊の怒りや悲しみや無念を鎮撫し静める。だからこそ、世阿弥は『風姿花伝』で「外道を和らげ、魔縁を静む」と書き記したのである。

「魔縁」とはさまざまな災いをも含んでいる。現在の出来事に引きつけて言えば、さしずめ新型コロナウイルスの感染拡大の現象である。これを鎮めることができなければ「天下太平」は生まれえない。日本赤十字社が「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！ く負のスパイラルを断ち切るために」の中

で指摘しているように、病気が不安と差別を拡大させていく「負のスパイラル」を生み出すことがある。日赤文書は、感染症に三種の位相があることを指摘する。第一に感染症そのもの（今回の場合は新型コロナウイルス）。第二に、「不安と恐れ」という「感染症」。第三に、「嫌悪・偏見・差別」という「感染症」。では、それを「断ち切る」ためにはどのようなことをすればよいか？

もちろん、手洗い・咳エチケット・人混み（密閉・密集・密接の三密）を避けることが必要だ。加えて、第二の感染症である「不安と恐れ」を防ぐためには、「気づく力・聴く力・自分を支える力」が必要である。さらに、第三の感染症である「嫌悪・偏見・差別」を防ぐためには「ねぎらい・敬意」が必要であると前掲文書は説明している。

世阿弥が大成していった能（申樂）とは、まさにこのような、「気づく力・聴く力・自分を支える力・ねぎらい・敬意」という集合的免疫力を強化することとで「天下太平」を生み出す、「天下の御祈祷」であった。だからこそ、世阿弥も禅竹も、あらゆる差別を

なくす天台本覚思想の「一仏成道觀見法界、草木國土悉皆成仏」の命題を繰返し謡った。その意味と原点を再認識する必要がある。

世阿弥たちの悲嘆と悲願は何であったのか？ 世阿弥にとって「魔縁」とは何であり、「福祐」をもたらす「天下の御祈祷」とは何であったのか？ 世阿弥は能の「悲願」を「悲嘆」とともに生きた、その時代の「気づく力・聴く力・自分を支える力・ねぎらい・敬意」の探究者であり表現者であり臨床家であった。能は大変優れた臨床心理「楽」であり、精神医「楽」である。

世阿弥が大成した複式夢幻能においては、諸国一見の僧が「諸国」を「廻国」し、その土地に絡む悲嘆を抱える不成仏霊と出遭い、その霊のグリーフ（悲嘆）とスピリチュアルペイン（霊的痛み）の声を聴き取って、心からの祈りを捧げて成仏を願い、鎮魂供養する中で、悲しみと痛みを持った幽霊は浄化され、一舞舞って橋掛かりを通してあの世に還ってゆくというスピリチュアルケアの物語が展開される。

さて、ここで、作者不詳の『谷行』を取り上げたい。

（『谷行』の詞章は流派によってさまざまであるが、現行の観世流では、役の行者の役が出ない。今回は行者が登場する演出の国立能楽堂特別公演（平成二年七月二十九日）のパンフレット詞章より引用する）

冒頭で、「これは都東山、今熊野に住まひする客僧にて候、さてもそれがし幼き弟子を一人持ちて候ふ、名をば松若と申し候、かの者父にはおくれ、母一人に候ふほどに、不便に候ひて常は里に置き候、また明日は、峰入りを仕り候ふ間、立ち越え松若に暇乞ひをせばやと存じ候」と、京の今熊野に住むワキの帥の阿闍梨が出て来て名乗りを上げる。父を喪い、母一人子一人の少年松若のところに帥の阿闍梨が「暇乞ひ」にやってくる。帥の阿闍梨は大先達としてこれから修験道の峰入りの修行に行くと言げると、松若は自分も連れて行ってほしいと言う。「母の風のこちにて候へば、おん祈りのために参らうず」と、風邪を引いている母のために峰入りに同行したいと懇願する。帥の阿闍梨も母も、これは大変厳しい「難行捨身の行」だからと反対するが、「仰せはさるおんことにて候へども、身は難行の道

に出でて、母の現世を祈らんと、思ひ立ちたるばかりなり」と、修行は母の現世を祈るためだと懸命に帥の阿闍梨と母に説いて許しを得た。こうして、松若は幼い身ながらも、厳しい山岳抖擻とそうの修行の地である葛城山に向かったのである。

この葛城山に向かう途中の道行の謡は、旅の遙けさを醸し出していて大変情趣豊かである。「今日思ひ立つ道の辺の、便りは深き志し、ただ孝行の心力に、馬はあれども徒歩かちに行く。こは誰がためか宇治の山、都出で、今日瓶みかの原泉川、川風寒み千鳥鳴く、声こそ今日の夕べなれ。ふりさけ見れば春日なる、三笠の山をさし過ぎて、布留ふるの神杉過ぎがてに、三輪の山本よそに見て、たれわが庵と定めける、峰の巖の苔衣、片敷きそむる葛城の、露こそ宿りなりけれ」。その情景描写は修行の旅の過程をスペクタクルに描き出す。

しかし、母の感染症が移ったのか、松若も風邪を引き、体調を崩してしまう。そしてそのことを心配して、帥の阿闍梨は隠していたが、他の山伏修行者たちに知られ、峰入りの途中で病気になった者は昔

からのしきたりである「大法」によって「谷行」を行わなければならぬということになる。

帥の阿闍梨は、不憫に思いつつも「大法」による「谷行」のことを松若に諭す。

「いかに松若確かに聞け。この道に出でてかやうに病気する者をば、谷行とて遙かの谷に落とし入れ、忽ち命を失ふこと、これ昔よりの大法なり、命にかはるものならば、おん身のために捨てん身の、なにか命も惜しからん、返す返す、進退谷きよまりてこそ候へ」松若は、「仰せ承り候、この道に出でて命を捨てんことこそ、最も望むところなれども、母のおん嘆きの色、それこそ深き悲しみなれ、また仮初も他生の縁、みな人々におん名残りこそ惜しう候へ」と応える。

そのやり取りを聞いて、皆声を上げて咽むせび泣いた。それを地謡が「なにと言ひやる方もなく、みな声をあげ涙に、咽ぶ心ぞ哀れなる」と哀切に謡う。

病気の母の健康と現世安堵のために親孝行の願を持って松若は修行に出た。しかしそこで母の病気が移って感染症の症状を出した。行中に病気になるの

は修行者として未熟であり、その後の厳しい修行に堪えることはできない。そこで、修行途中であつても、一行を離れて「谷行」というたつた一人の死出の旅に出なければならぬ。母のいのちの寿福増長・無事長遠を願う行であつたはずが、自分の死をもたらすというパラドックスを生む。修行の「大法」では、そこで潔く死を迎えねばならぬ。それがこれまでの厳しいしきたりであつた。そこで、その「大法」である掟に従つて、松若の谷行が行われた。

しかし、能『谷行』は、ここで奇蹟が起こる。これまで守られてきた「大法」に対する「脱法」とも「超法」とも言える超法的な行為が展開されることになる。帥の阿闍梨が自分も谷行すると言ひ出したのだ。「まづ案してもご覧候へ、都に帰るかの方の母には何と申すべき、殊更嘆きも病氣も同じこと、急ぎそれがしをも谷行に行なひて給はり候へ」と。嘆きも病氣も同じだ。自分も松若と同じように谷行する、と。まさにこれは「グリーンフケアとしての寄り添いの行」である。

これを聞いたワキツレの山伏は、「げにげに先達

のおん嘆き尤もにて候、われらの存じ候ふは、年月の行徳もかやうのためにてこそ候へ、ひと祈りおん祈りあつて、松若殿をふたたび蘇生させおん申しあれかしと存じ候」と謡い、大先達が谷行するならば、自分たちも従い、これまで修行してきた行力功徳を發揮し、共に松若の「蘇生」を祈願しようと言う。ワキの大先達は、「さやうのことこそ聞かまほしう候へ、この山の山神護法善神、並びに不動明王の索にかけて、松若をふたたび蘇生させうするにて候、皆々力を添へて賜はり候へ」と修行者全員の「御祈祷」の力の結集を図る。

こうして、全員で、「使者の鬼神の伎楽伎女を、遣はし助けおはしませ」と乞ひ祈る。すると、役の修行者が現れ、「久修練行の山路険しくして、衆生三毒の冥闇を照らし、積功累徳の床の上には、真如の月朗かにして、いたらぬ隈もあるまじや、寂寞無人声、誦誦此經典、我尔時為現、清浄光明身。いかに面々たしかに聞け、かの小童は他に異なる、親孝行の人体なれば、たちまち命を助くるなり、心安かれ人々よ」と慈悲を垂れ靈験を現した。

帥の阿闍梨はそれを聞いて、「あら有難のおんことや」と感謝を捧げる。こうして、松若は蘇生した。葛城山を開いた修験道の開祖役の行者小角も大変な親孝行(母孝行)であった(と伝えられる)。その役小角と同様、松若も母孝行な子であった。その松若に役の行者は情けをかけ、親孝行は成就し、行者の使いである伎楽鬼神が登場する。

このようにして、『谷行』は以下の地謡で終わる。「伎楽鬼神は飛び来り、伎楽鬼神は飛び来つて、行者のお前に跪いて、頭を傾け仰せを受けて、谷行に飛び翔つて、上に覆へる土木盤石、押し倒し取り払つて、上なる土をばやはらはらやはらと、静かに返してかの小童を、恙もなく抱き上げ、行者のお前に参らすれば、行者は喜悦の色をなし、慈悲のおん手に髪を撫で、善哉善哉孝行切なる、心を感じるぞとて、帰らせ給へば伎楽も共に、み先を払つ



谷行 観世榮夫 H 2.7.29 (吉越立雄 撮影)

て険しき道を、分けつ潜りつ登るや高間の、雲霧伝ふや葛城の、人の目にこそかからざれども、まことは渡せる岩橋を、大峰かけて遥々と、大峰かけて遥々と、虚空を渡つて失せにけり」

宮沢賢治の『グスコブドリの伝記』にも通じる自己犠牲的な少年の行為と神仏の功德と慈悲による蘇生。そのような死と再生の道行こそ、「魔縁」に苦しむこの今の鎮めの道として必要である。松若と谷行を共にするワキの「諸国一見の僧」の役

目を持つ「帥の阿闍梨」は、役の行者の意思を受け継ぐ後継者であり、グリーンフケアやスピリチュアルケアを実践する傾聴臨床家にして鎮魂供養を行なう臨床宗教師であった。「天下の御祈祷」として、能は不壊不滅である。

(京大名誉教授・上智大学グリーンフケア研究所特任教授)